いつを昔

誹番匠
其角

へ5
1797

へ5
1797
特
へ 5
1797

定

一誹諧ハ力なき草
廿集のうちもくなく
入魚のうきるもの也

月日

去来校

誹番近てのゝきの名殊ゝも
はゝんてみさりけり　書ス

十銘百句　洛京極徳
慈法和尚

天象

あさもすめ南の譽ゝ星れた　露沾
風けり二日の月さへ見ちるう　荷兮
旅けし
ゆうくと日を顔面も秋の風　公羽

風雅ハ天地ノ流　ありとあらゆるを

天地の恩とぞしらし時雨かな　湖春

まちの色も雨ぐもよ見ゆる衣　加賀 一笑

十月やいつくへ色のくろきゆく　継也

武士の峠なくさゆんかの遊女　伏見 好春

霄闇や青のりとりよ鳴海浮　其角

都近よ薫りあるあしとり　由之

なの花も稲妻の跡となりけり　翁

二 地儀

峰ノ雪比良の谷くおちしけり　膳所 正秀

肌の紀石ぞかくしん花の山　僧 河遊

面白く汐干の未色物干をき　八橋

紙桜よし嵯峨山や冬ざくら　京 去来

うまくらけ　あそひて

松原や岳よしあ峰が山さかり　枳風

おケちりれのなくる道くるも流行　景道

美濃ゟ入る

山陰や身を養はん瓜畠　翁

初下向

富士の山師走もぬさに流るゝか　湖春

下る人や川瀬にあゆの桜麻　全峯

加賀ゟ来る

見せはやな[illegible]右ハあつみ　翁

三 名所

秋さひし御門かのうち鳴る音　伊勢 柴雫

松よりも伊勢の素貴人それ　其角

殿つくり懸みけるつ花かな　加賀 一笑

垣根破るその若竹をかきしの露　素堂

秋ある障子のひまや秋の風　巴風

鶏のかねも寒しや霜の暮れ　文鱗

十月や草まてとゆる庭の隅　尚白

名月を驛(ムニヤ)子みるや酒さゝやし　全峯

一木つゝきれぬる場の桜かな　春雷

牧方の宿にして

馬士に負れしきぬ〳〵おくさの昏　毛紈

四　草部

清らしくなけ比の日かな　禄出

楊子に題ス

いつの時人に語りん白牡丹　平田　李由

けむりてさらしのねぶか白かな　千那

川舟の皆にかゝれ菖うれ　溪石

おもかゝや弓矢くもてぬみの花　素堂

河骨や終にひらかぬ色も無　仝

嵐雪か悲うきしけり
きんふてみなれそ

葬ちて下々のつくさし哉　翁

元服しゑ

お髪も袴の花かしらの菊　山川

いゝごみは戎(エビス)てちる水仙花　交五

枯芦に氷をのこす汐干かな　苔翠

五 木詠

銀杏やしほのもゆる木末かな　露沾

梅けさそなんめの白かな　路通

旅思

うつの山わけてある桜かな　美乃 芦夕

其枝うつれといへと散る椿　李下

手書の妹さりし旅哉　琢夕

詠り気をいそり村橲　大津 正義

柚乃花のそのまの甚白かな　善船

やどり木や蛛もられをも蕾　東吹

芭蕉翁の　舊艸

志きしくもやさし枯木かつ夕附日　孤角

遊二園城寺一

かしひる三井の二王や冬木立　仝

六 鳥詠

子乃報子薬泥む餅とくかな　山川

菅笠や吹上られて詠けり　挙白

重五

嗅やつしに桃花の鶏の声　其角

其る声やあつて来よ　ほとけも　ホトヽキス　仝

絡の背子漂（タヽヨ）ふ流の浮草かな　粛山

おもしろう様子なきめ日そなかりけり　桜塚 西吟

けしかるハ我の旅すがる

木兎（ミヽツク）の猫まねんや秋の昏　其角

腹のふくらみ人をさそふる池の外かな　尾陽 野水

子を卧て尾をつまれたる雛子かな　山川

冬の日をほしてきぬる精霊かな　友五

七

獣部

獅子舞を見て
感あり

蝶しるや獅子ハけものゝ長しと　其角

猫の恋鼠もとらぬあはれなれ　琴風

花雨や庭に雛の子そだてゝ　友五
山里の暁やさむく啼狐　是吉
夕立やそれまで牛のかちく　李下
爪紫も旅の姿や的追　荷兮

艸花
今ころし雉をとらる犬の声　其角
山さくら猿を放して梢かれ　仝
山まめやつくしはゐる

常住をゆるさぬ人へ鹿の声　郎棠
君がうつして
嵐にもやうて船まん丸舞　其角

八
虫部

蝶子も命を游ケ二三月　京 観水
我恋を花ちるあとの毛虫かな　了沙
粃ぞや竹に生付るとつかり　其角
鳥ゆく蝶をいつくより昏れ声　仝

草の葉を落るより飛螢かな　翁
世の更を擲しくりし蝉の殻　松風
蟷螂の尋常に死ぬ枯野かな　乙蘭
百とせの経ぬる人や冬の蝿　伊与　粛山
力ぬけて蝶となりきぬる落葉かな　巴風
うつり火の南をさけや蚤　乙角

九　神祇
二見の圖を拝み侍りて

うたがふな潮の花も浦の春　翁

女子の疱瘡しけるをとふらひて

餅の形や花雪ふつる外の咲　乙角
暑日の露も凍る祭かな　亀翁
老ても又し女神田かな　景道
涼しさや海をうしろにある我堂　粛山
此社をつゝしみる刈穂かな　山川
十月もれなあや是の山の外　法元

あれ[illegible]て沛枝すゝき流けり　尚白

元日は法師目出度哉　渓石

遷宮の良材ともなりて

大工達の久しき新や神の秋　其角

十 釈教

明星悟心

天目はけさ師走八日の風寒　秋風

尾の子の尾にゐる絲くんけり　彫棠

思ひ出古寺やさし新のもんか　巴風

灌佛よあのくれる袷かな　景道

祢つの田にあみなれ山田けり　千那

同年乃人もはへなる玉祭　雲口

寄幻吁老

老僧の筆をとらむなけれ　其角

寒山の讃

寐る息子門の色くしき念けり　仝

遊清水寺

人乃世やのかれる日は寺林　仝

布袋乃讃

大虚涼し禅師の指れゆく所　仝

交題百句

感心　吹とらを迄て
つまの夜嵐より　加生つま

我子なり仇をもやしぬ夜の雪　とも　其角妓

うりさまつみに降る用心　是吉

扇とりて九郎か暮の仕舞かな　幾也

ちよの奥から色とりあくれ

小袖とも庭子出かり避暑坊主　角上　少年

山総やはゝみるゝ家音あくれし　紫栗奴

尼になりて太秦より　こゝろ
さみけるなり
花を守るはちりや昼のうき世者　撫
杉将り柳の鐵か
月もさ安乃後行ちまで　露沾
雉乃こゑよ多き入声　翁
辞世
もんじゃく文消ぬ蛍かな　去来妹 千子
秋の昏肥るあとに通りかな　尚白奴 よ之

艸紙の中々ん二日を花のちる　仙化奴 吼雲
二 魚部
鯰の子や何も水に進て流れ也　八橋
我みや其のあとつる柳鱧　遠水
漸毎に飛んけけ さけるくて
貫之の紙のむしにしら知らじ　其角
あらたに新鮭ゆくうぐあかな　普船
もの雨鯛子塩にるあめへや　仙化

ひく汐に連ておりし大海苔　莫陵
若竹の葉にあらし比雛に　百里
入あひの鐘やくもぜ鈴　友五
鯉賣に來る人を醉しけん　翁
九廻て鯖はへけ買み月に　粛山

三
旅
旅人を送りて
木曽の月見し比

付や蝶ひとり泣月の友　翁
いさよひもまた更科の郡哉　空

夜色山　沖津すし

秋虫や松風さそく荷を送　定角
月の紀の錦消る遠て泊舟　紫雫
日もすけくたそ給色似合なり　湖水
夏州の森黒く夕ケ見ゆ暁の舟　鈴通
侘しさはてて翁の
白のみ似てしまて
寒さ耐て樹ぞ月も寒られけて　尾陽　越人
一葉の陰ありても寒さ野原　珍夕

行ぬけて森打しやさくら麻　かゞ　一笑

伏見西蓮寺興行

もつれさす人ものはるかぬ哉　不角

四　戀

髪さくる容髪にかゝる白髪哉　山川

髪さへ乱しつゝ恋なされまじや　雨等

老柳まり寒まわ人のまなかな　卜女
この志らの真似

凡字是あり八ちなみ文字　其角

扇折る子は舟にまけけり哉　尚白

くせよみのあやしつゝ扇折　桃風

旅人よ見しあくるゝ尾目哉　□秋

一まろ見は詩人のきて躍るまゝ　尚白

星合や銀の河入まき能乃る　氷花

古郷の夜ハ紙白しとめの哉　釈行舟

五　述懐

翁に供して宿ある程に
まかりけるに

散花にもずさ触たり奥の院　杜國

二星や猫法師を寝覚もありし　路通

此身に無藝を知ん花も有　露沾

あさがほの三十迄て夜半の秋　八橋

古足袋の四十に足をふみ込ぬ　嵐雪

とにかくにありつゝて
こと終りけりと　光俊

山陵(カラ)の主を歩きまはる師走かな　其角

はぢしらで汲寒し夜の衾　尚白

あつかひ事の酒債(サカテ)と紛れけり　千那

火桶抱てかしらの臍(ホソ)をかくしける　路通

番匠の中に七字を
うれしくしるして

うし炭の崩れ迄力の残る火　洒堂

六
寒暑

梅さへ採るは寒気なけれども薫して　山川

風雅ありとして作る窓の氷　比竹

雪ハ木で風さはりの涼(スヾ)し　曽良

うかり着てあつしゆふべのあつ衾　野水

涼しさのあはれのゆかしかの蝉　坂本 霧之

暑き日も樅(モミ)の木の間の夕日かな　素堂

我顔ふけりつゝ凡のしつかな　之道

なくはしも扇くもぬるき計し　杉風

扇折りしれて揚る汗ぬくひ　千那

まちさする吹田の稲のあつさ哉　渓石

七

賞心　東坡文集

花の夜の人気く洩るゝ小出か　美濃 荊口

大橋もまよと見れるあとひかり　枳風

孫生三日抱額(ヌカ)子を抱かれし哉　尚白

居並ひて土さけ昼を起て涼けり　三翁

船うけて茶をもてなする女かな　巴風

欄の琵琶を横ぬり蝶の夢　薫風

名月や山を思へは海も寸　去来

ちぜ鶴も笑てなものと鶴かな　由之

初雪や人々さまに物しらん　淀　三ケ

雪の夜は兄の彼の跡絶也　公翁

八
酒

山中子見とあそびてとよ

いさかん年の酒盛かいざめり　其角

その花に酔るよ眼や小盞　仝

花けふりうきてかけ酒の泡　嵐雪

酒ふけて枝あすらはしらかし　八橋

清賓の地をしめて
酌酒亭と名付しに

忘れてて撒師に酒を給しけり　彫棠

草庵蕎酒の興
秋五升翁あり

めくらのとま酒の弥よ這せなり　其角

名月や酒のまんと匏うかれ　仝

荷にゝ奴行ぬく
るんさく悟しれて

梅けさぬ額しるる酒のうん　仝

酒やよふ雪にみやされし門の前　若翠

大津やあれのむ樽の口あけん　峡水

十月九日　盞哉亭にて

はつ山やこゝろ有酒の夷講　其角

ひろさハ
池の汀その氷やあきところ　去来

のゝえや
出うしみ入れの縫をとめし　加生

清滝や淀樹さりて我意　角

佐川ら
風の地を落さしも犯ぬ　其

草も皆女なり あめさうの町　生

社乃宮のやぶ〳〵淡け
うひしき槌のうらしけき　其角

鍛冶よ隠士ひとまん畑れ家　去来

大井里
もえ杭の木間のそかん貴なる　加生

うつり日
ことに添や物おゝきすね

日
縫ひ紙子よいもん蓬識の毛　角
かさのつまのゆされぐなり

十、
湖上吟　十月二日膳所ニ於て

帆のけの風あれや田のみぞれしお　仝

此月のあるさへ見えぬあはの海 曲水
昼ねやさゝれ似合ぬ鳴るゝみ 素葉
千那子休して父の古へ
望田のくとあひろさて
諸子みな手にする金や勢田の気 其角
輝も色絹してえせんもしく連 尚白
よき日和子月のかし花村する 角
蛍のかげ楽かしやくらあぶ 仝
元禄り下の七日
尚白亭 餞 文枕

圍をして菊依頼する小女かな 尚白
橋下寒さともしの火の節 加生
茶師の発楷しよくされて 千那
次
ねまれ日や病沈よの花蕭しき 仝
高根のわかし鯯さする 白
洗はれ石手踵の洗ひて 生
亦

ひとつ松この所から浦の雪　生

鴨こゑは峯を入るゝの月　角

鈴かけし片耳聞するほとて　白

続みなし栗の撰ひけり

色紙短冊さし入て尾張あつめ

此集の人足まゐりしを結ふ

鴨啼や弓矢を捨て十餘年　去来

身はほそらしきぬれまつ小刀　嵐雪

はらはらと粟て紫の糸振かし　其角

歌くるゝ時竜骨車此月　来

きりくれは雲も湯く山まて　雪

盃付ケて露をはちやる　角

されしくも影見ゆる篭晴る来
まつ手枕を入て　寝る
椒衣まゝとも高ふ此出うちく
留守おほはりし星の藁刈
継うそそ懺立る雨の中
平家の陣を見る浦人、
船のけくよはりしれ玉祭　角
畠の中にほゆる有就　雪

いさそれ世るれ浮退る老れ撲　角
元（モト）よし原此あさけ御らん　雪
花なるよま嫁出らむけふり　角
並ん餅つくと来ぬ子告けれ　雪
荒許よ給るけなる夜の柳　仝
うつらかくけ関札の数　角
よめ娘見ゆる逃のいちさやき　雪
小原黒木そあをよほひける　角

味噌さまし草鞋しる安思ひ　雪

雪ゝのきひてんき法入あら　角

八京の月と席よき見ゐて　来

越のこゝろのいよいよあかれ

粉糠よまなほさける腸の元

縒(ヨクリ)まるまつけし酒さるとれ

とつくんゑはりりて床とりて　雪

一火燵を蹴(ケ)出して思ひあまりの　角

手紙りて逢の限(リ)と成くなり　同

みくやれはくもと宮仕へある　来

鬚おとし睨(ニキ)ゝよ方のめでこゝよ　同

長(タケ)球らして画てむすよ水引　雪

花のまてよ名高き法のまつりまで　角

柳しみゝう絃管の舟　雪

去来　十四句
嵐雪　十一句
其角　十一句

あんなをひらける人の心と
ゆかしくてみのかしこ心ざし
ゆかしからて抱酌り
真はふらしめ

下外にはたらきや糸桜　巴風
犬もさてのも一日の友　其角
拵造る小屋のまへの花は　仝
薮のこぬしほこ過ぬべき　風
菊も黄に兵志りけり月の色　仝
鼻がしらもきも亦秋のくれ　角

小坊主に名を楽進といふがあり
次打あつめ火の紙子ぬぐ
いざ遍歴へさる里一足そひかる
御さ月あてに此比の禅
あらそふみに喧嘩をしかける
杜絆にかりて重たき訴しる
裏しも関寺おこたりなきや
安養界をしかぬるむかし

板屋階子(ハシ)の下にたてしおに
蛤やり吹きて姑いはせ貝
泣ぬきうちしき花さくたゝしく
月のせ流るゝ白黒の胡麻
吹つるよ一遍どうり秋の風
物さきまうしき峯入の伏
倒と来とのあるくぬきる鐘
又まへ游ふ森忙(ホレ)しる哉

ほしこえ無せがはらし行心
聴ませまるとのまろうと
糀なれ子姤る常をこせみなり
うつまゑせむる神の蛇
慈心佛法の力を教ぬト
名ぬる屍(カハネ)あらうやそれも
こえうしの越の白山山いつ
物あきぬつも水うきの声

或かたみ許り比丘とてこの
めでたるおかしきり住持乃
深く悦てみやまれけれ
五の法をとんす

能睡　あくびぬ所嗅出して眠りけり

能忘ル　かまくらも七年養ふ夜の雨

能捕　鶉うと鼠の味を問てはし

能狂　みけろみと頻りにくるふ心かな

能耽サカル　猫のあるめかし[illegible]もなし

舎利講ねみ侍りしけり
十如是のくさぐさかなひてそれ
このくにに叶ひたる拾ひあつめ侍る

相　稲妻や思ひもよらぬおどろき　其角

性　桜は[illegible]佛の[illegible]　由之

体　鬼灯のこころつてや[illegible]　[illegible]

力　[illegible]雪の[illegible]　仝

作　秋の田や[illegible]稗二俵　尚白

因　弓[illegible]　去来

縁　山郎の鶴をやく心入かな　粛山

県　二子山二子ひらくん霧晴る　其角

報　去年の蔦よ紅葉かゝるかきね哉　素堂

本未究竟等　うるはしくてはなれさく炭のくらかな　戦竹

内秘菩薩行　夕立にかれくへしそ渡舟　千那

同講のくせ　くもの月をあそして鶴の持山のほとゝぎすん

新月やいつを昔の男山　其角

鉢たゝき暁かたの一声は冬の
夜さへ[illegible]
[illegible]

箒こせまねても見せん鉢扣　去来

ゆてまうされた
長嘯の墓もめくるか鉢たゝき　翁
そのつき瓢みせて鉢たゝき　[illegible]
世の中はこれより寒しさもなくば　尚白
ことくぞ鉢叩く[illegible]鉢扣　其角

艸庵の蕉すゝし
う色ふられて
秋風をほうちて　普船
星合の紙やちゝ紙の先綾(リヨ)こ
節(フシ)く紋(アヤ)こ御篋のけふ月　其角
十二三あつまる雁の数見えて　李下
起てを倒(タヲ)し下戸をうつ雪　船
川沖や舟よせむめ日の澪の音　角
こらへ魚の訛ぬ　下

蛇の抜てうけぬる八字蓮　船
いつつ鮭と我猫の墓　角
中々細(ヲサナ)けりやむ長き雨　下
花を切らみを〆(シテ)桂より　船
紅(ユウ)向(カウ)の松のひまわる　角
うかし　なれども子をさ振るう　下
封文こけらひ出し紙籠被(カツキ)　船
抓し毎し物拘み絲　角

弱とえていつもの酒面白　下
山く晴し比良の湊し　船
鎧着て月みる袖の乳頭　角
胸乃秋ちる其弟僧正　下
房気やげぬあるは此大佛　船
究井の淵(ウツ)を蝦く葉蘰(カツラ)　角
としして女を肩に負てもり　下
贄(ニヱ)ありて進ていくしるしを　船

一節に来たる恵し日の光　角
船綸にみえて鯉くひよつ　下
浦風にくらし柏檀(イフキ)の高き立　船
空征にて影(エイ)をうつさる縮　角
修枕南をと旅ていたまへせ　下
是をえ成る浅草の市　船
宜しきそ唯秋月暮雪　角
あかしも夷にかなふ献立　下

往連の肉比丘山伏もゆるさし　丞

物ふりしてゆめを圓(アハ)ゐる　角

哀の紋縁の調度子恥しく　下

法も思ひしと悟き鄙なり　丞

年寄ハなくさみもせんぞしむの法　角

行様を擲てもきし白萩　下

西明寺ちかく

角なりて男也けり康の支　溪石

法くまて河さき罷の卜姐(シメ)　甚甫

白浪しそつまもぬ雪も散浪て　仝

走りし帆おろせ将の岩組　石

秋やでて尾花をあれる月の秋　同

四の鈴ふて櫓(キ)おし枕風　角

萬る葉魔所にも遊ぶ我意　角
木葉こぼれて何さらし釜　石
犀川の渡りもさぞ迄張り　同
上戸を好む酒の盛かり　角
髪を児法師と老てみえくらしき　仝
ゆゑにゆかよふ物の怪乃汗　石
帳も簾も只御苫の恥かし　同
猪の田荒すか和哥の名月　角

雲居の二百町坂まさしやと　仝
とほし枕乃あつ椒を嚙　石
純るを花にりせる口惜さ　角
何山吹より地下の歌よみ　仝
汲よせて泉ヶ入る六乃水　石
義人ぬすまとも寝耽ゆえん　同
三世よむ信者といはれ気のふて　角
かいつぶさらし年も悔らん　仝

糸花や心も深み水あかし　石
そうもじ筋へ枕ばかりと絶　同
生身玉うらひ夜ましてまり　角
感状もうけ月のうやさ　仝
村落鴉の跡を見るも入て　石
漕切り舟を安房の権方　同
ふつても龍の尾まふ女を　角
幟の音うつしさを　増縄　石

郭公文壇ながき屋の雲霧里　石
合羽そろひの足ならず雨　角
あまかりき太々おてくるし　仝
なにけいゑめ　鯛の焼肴　石
花見ゆお酔て立てむそれ　同
こてふ今似たり眠る絶ま　角

溪石　十八句
其角　十八句

やかひけり　女　秋色

駅より里迄みな〳〵女かな　同

初霧けり風さくしたる寂哉　同

ひより哉やさみ　火躰色　東莱乃伽

其角撰集にて誹番匠といへはく是て
予ヶ謝なりし予かやうのものをと
誠けれは史記の滑稽ハ俳諧にして
註せしを基きて貫之の古今集く誹
の字となしけるを造作の物として
世に其の好士匠ともすしてあり既
教外別の歌ハ組合されよ近ていハ山崎の
宗鑑いせの守武飛騨竹田の高名は

あらはに文も深の義とらぬ人もあり
誹諧にたはふれたる人ありてかの宗鑑が大
つくはに根源して流は沖糟と名付
世にわたるをもてひろめて今は林に
村をなすに詩海に筏（イカダ）となりて経に
心詞潮にゆく新しく磨くに光をそへ
そ我やまとの常にはの工とあらはす
ものいはまるはある皆そのまま孫子

うつせ虚実に其はしも直に
けりしさ海をや此言わが身のあはれ
削なる風にあらはれて一句木にて行をも
つさて物数寄とよるものひはりける統
とめるにすこし目にかなひて悦ぶ人多くあり
もうはれたるくも破損にあひしあり
是大近の害をしれて必延をもとめ
あらひ成へし志はあまりに今の代の人

さとらで無しにてかなのしも人の心をとら
神しき作ハ鏡に触りむせる詞もなく
感ぜ亦正風躰の骨髄のハ達して作るなれ
ぬる事を常に心得をつくべく 一 発句云
そ即ち掛書道ハ甚だしく風躰をよく
心得のある人ハ一句ハ詞を尽くして作り出るべく
其用ひ詞のありあ姿によりて掛りけれ
番道なるもの 器量によれ成るなり

仮名にて五字を棟(ウハリ)し七字を揃(タルキ)と
云ふ人あらんまた此上を柱の棟
たりて合(セ)せて初めハ此句ともいふを
やすく此ハまた一句となし其句をハ彼構(ハリ)
極(ロ)傑(ミュ)儒などの道をもちゐて宮室なる
作りなさしめ此集にてその道あるの
細工を設けしてみまかりし後の世にも
待たれよとて撰しおいたり 寺田善甫古人

乃心を述れ基俊卿の言をもちゐんと思
ふ古人を誹らは後人を詮する所なりされは
甚心を細にしていにしへよりの詞もおろそかならす
きもの只つけりよりて善悪ハ有へきと
乃ち人々の為に乃て歌の姿なりと謂ふ事
云りされは此道ハ歌の道と同し情
なれとも かく成りけるつきとしあらはなを
ちるへき人は材木をあつめて支度すへしとかや

是等の事ハ此道遊氏の功なれは比
く俳諧道ひとつに轄氏の意を
すえ管子の教へしまゝにあらす
おほしまはすいひて止ぬ

誹諧堂湖春書

元禄三歳南星和日

京寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛板